

IN THE LIFE ワンダー プリント

塩崎浩子・文
Text by Hiroko Shiozaki

眼がくらむほど眩しい太陽の光、甘くけだるい空気、あふれんばかりの花や緑。そこにヌードの男性や女性たちが、会話をかわすことなく、特に何かをしているふうでもなく、ただ静かにその美しい肉体をレンズの前に投げ出している。

人体の美しさを追求してきたロサンゼルス在住の女性写真家、モナ・クーン (Mona Kuhn) が今年春に発表した最新シリーズ「Evidence」は、彼女が毎年夏を過ごすフランスのあるネイチャリスト・コミュニティで、彼らと長い時間ともに生活し、作り上げられた作品である。

被写体のその圧倒的な肉体の存在感とは対照的に、彼らの視線はこちらにストレートに投げかけられることはなく、少しずらされていたり、ガラスに反射する光に遮られたりする。表情もどこかもの憂げで、それぞれの想いに耽っているように見える。

柔らかく優しいトーンの中にも、どこかすっと張り詰めた緊張感が漂っているのだ。

なぜ「Evidence (証拠/形跡)」なのだろうか？ クーンにその理由を尋ねてみた。

「証拠という言葉はタイトルに使ったのは、犯罪の記録に関わるような意味ではなく、むしろ哲学的な意味です。ここでいう証拠とは、主に自分自身の感覚を通して見ることが出来るものです。私たちの周囲には感じ取ることができても証明できないものがたくさんあります。この写真集に収められたイメージは、日々の現実の複雑さから逃れ、親しい友達とともにいくつもの夏を過ごして得た、確かな幸福の感情を物語っています。ここには確かにユートピアが存在するという証があり、これらのイメージはそのユートピアの存在の唯一の証拠、時間の形見なのです」

被写界深度はごく浅く、ピントが合っている画面手前の人物は肌のきめまで感じ取れ

るほど鮮明なのに、他の人物や背景は眼の前から遠のいていき、ぼやけ、しまいには背後の空気にそっと溶け込んでしまう。とても明るいのに関して遠くまで見通せない。写真と現実、現実と夢とのあわいを自由に行き来するかのようになり、その像は見つめれば見つめるほど曖昧になっていくのである。

彼女の作品を初めて見た時から「見つめる」ことについて考えていた。クーンは人体の美しさといういわば古典的なモチーフを追求しながらも、その中に存在する、人と人が(あるいは人と自然とが)互いに共鳴する魂や心の有りようをも写し出そうとしているように思える。それは曖昧でつかみどころがなく証明することはできない。しかし確かに自分自身の感覚で見て、感じる事が出来るものだ。そうした相互作用や共鳴こそが、クーンが探し求めている「証拠」ではないだろうか。

楽園の「証拠」を追い求めて モナ・クーン

人体の美しさを静謐な画面でとらえながら
写真家の視線はさらにその内へと入り込む。



"Evidence, 2006" ©MONA KUIHN



"Fatale, 2006" ©MONA KUIHN

Mona Kuhn (モナ・クーン)

1969年ブラジル・サンパウロ生まれ。現在ロサンゼルス在住。米国オハイオ州立大学卒業。97年以降米国内外で展覧会を開催。98年よりゲティ美術情報研究所(ロサンゼルス)に個人研究員として在籍。04年に初のモノグラフ「Photographs」を刊行。07年春には2冊目となる「Evidence」(ともにSteidl社)を発表し、ニューヨーク、ロサンゼルスなどで同作品の個展を開催した。「Evidence」にはカラー作品54点を収録。通常版のほか作品付き限定版もある。作家、作品、取り扱いギャラリーなどの詳細はwww.monakuhn.com